

---

# 千年の神子

真咲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

千年の神子

### 【NNコード】

N4519M

### 【作者名】

真咲

### 【あらすじ】

はじまりは、一体、何だったのだろうか？

永久に続くはずだと。

そう、信じて疑わなかつた『毎日』があっけなく終わりを告げたのは。

親も、他人も、世界すら。

あたしを『拒絶』するんだね。

なんとなく王道の異世界迷い込み物語。一章ひたすら暗くてイタイ  
です。

かさり、指先に微かな感覚が伝わる。

耳に届いた音と、その触覚から、それが既に朽ち果てた木の葉なのだと、琴子は鈍く動く頭の中で理解した。

陽光に輝く真白い砂壁の建造物は、それに勝るとも劣らない白亜の宮殿の下に、幾つもの数を有している。

ふんわり、風にのつて鼻をくすぐる柔らかな洗濯物の匂い。

子供の笑い声。

幸せそうな微笑を浮かべ、力強く『生きて』いる人々。

けれど、そんな喧騒に溢れる賑やかな街角を一步奥へ進めば、俗に『スラム』と呼ばれる犯罪と貧困の街が顔を覗かせる。

たとえ、ここが聖王國と呼ばれる誉れ高き国であつても、『闇』は必ず存在するのだ。

光があると、必然的に陰ができるよつて。

光の世界を愛する彼らは、通りを一本奥へ進んだこの『スラム』を、決して見ようとしない。

手を差し伸べようとはしない。  
その存在すらも、認めようととはしない。

結局、誰しも自分が一番可愛いのだ。

霞む視界に映る、確かに『温かさ』を、琴子は別世界の出来事のように感じて小さく嗤う。

そう。琴子もまた、この場所に流れ着いた数多の人間の中の『一人』であった。

陽を閉ざされた薄暗い空間に、シンと鼻を刺すような、カビの匂い。小さな路地に、力なく身体を横にして預けたまま、琴子はゆっくりと顔を動かした。

冷たい地面の感触が、頬に馴染む。指尖の感覚を辿れば、予想通り一枚の木の葉が映つた。瑞々しい碧ではなく、黄土色に変色した枯葉だ。

しかし、琴子は刹那、何の躊躇いも無くそれを握り締めると、口へ運んだ。

とにかく、腹が減っていた。

毒でなければ、何だつて良かつた。人が食べ残した残飯にありつける日は幸運だ。そうでない日は、草だつて木の根だつて、虫だつて。何だつて、食べた。

それでも、空腹はいつだつて琴子を襲う。

(なぜ、なんだろう…?)

口内に広がる苦い味を噛み締めながら、琴子はぽんやりと思考の波に埋もれる。

(なぜ…?)

なんだ。なぜ…、なにがどうして、自分がこのよつたな状況へ陥つてこらのだろうか?

鞍祇琴子は、つい一円ほど前までは、普通の女子高生だった。

日々、つまらない授業を受けに学校へ通い、週一回のクラブ活動に参加し、放課後は毎日のように近くのカフェのアルバイトへ向かう。休日は、そこそこ仲の良いクラスメイトと、買い物やカラオケへ出かけたりもした。

そう。残飯を漁る生活など、したことはなかつたのだ。  
草木や虫を口に含むなど論外だ。

一月近く風呂へ入らなかつたことも無い。

恐怖の対象として、忌み嫌われることも、罵倒を浴びせられることも、石を投げつけられることも。

地面を駆ける、馬の嘶き。

藍の空に響き渡る、剣戟。

人々の怒号と悲鳴。月光に閃く二田円に歪んだ笑み。濁つた双眸。

そして、紅に滲む

鮮血、すら。

十七年間生きてきて、初めての経験だった。

(いつたい、なんで、こんなことに、なったのかな…?)

口元へ寄せた手のひらを、握り締めた。否。握り締めようとした。けれど、力が入ることなく、琴子は小さく息を吐いた。空腹と疲労と、身体中を襲う数多の痛みで、もう、瞬きをすることがすら億劫だった。

冷たい地面の感覚が、横たわる身体にどこか心地良い。象牙色の肌は泥と血に塗れて、既にその色を無くしている。

ぼろぼろの外套の隙間から、元は高校の制服だったセーラー服の袖が覗いた。外套も制服も、至る所が破れたり解れたりしていて、黒く汚れている。

はじまりは、一体、何だったのだろうか?

永久に続くはずだと。

そう、信じて疑わなかつた『毎日』が、あっけなく終わりを告げたのは。

脳裏に蘇るのは、鮮やかなオッドアイと、高い鈴の音。琴子はゆっくりと瞼を下ろし、遠いようで近い過去に、想いを馳せた。

『選ばれた人間』なんて、世界に存在する何億の人間の中の、一体何人のことを示しているのだろうか。

人はいつだって、ありふれた日常、平凡な毎日を、意味も無く繰り返し、日々を淡々と過しているのだ。

無論、少女  
鞍袴琴子もまた、例外ではな  
かつた。

「琴子ー、今日カラオケ行くんだけどさ、あんたも行かない？」

放課後のチャイムが校舎に響いて数分後、ちょうど鞄に筆箱や教科書を詰め込んでいる途中で、そんな声が掛かった。

琴子はふと顔を上げ、ついで、どこか困ったように苦笑してみせる。

「いめん、今日バイト」

短く告げれば、途端、「えーっ、またあ？」と非難の声が上がった。

「あんた、いつもじやん。なに、そんなに極貧なワケえ？ いーじやん、バイトなんてさあ、親に小遣いせびれば！」

茶髪に縦巻きのパーマ。きつちり施されたメイク。綺麗にネイルアートされた爪で髪をかきあげ、まさにイマドキの『女子高生』であるクラスメイトが顔を顰める。

琴子は、彼女の台詞にほんの一瞬だけピクリと眉根を寄せ、しかしすぐに笑顔を繙った。

「あはは。極貧通り越して、赤貧だから。でも……そーだね、親にせびってみるのもいいかも」

「そりそり……絶対そうしたほうが良いって……」

軽やかに笑うクラスメイトたちに再び苦笑して……けれど、心中では冷めた視線を向け、琴子はじゃあねと手を振り、教室を後にした。

気分は、これ以上ないくらい、最悪だった。

長い廊下は、帰宅する多くの生徒や、部活やクラブへ向かう生徒で溢れている。

「親にせびれ……？」

ふざけんな。

「あんな親の金、死んだつているもんか……」

抑えきれない怒りに顔を歪ませて、琴子は両手を硬く握りしめた。

琴子は両親が死ぬほど嫌いだ。

彼らに頼つて生きたいとも、彼らの脛をかじつて生きたいとも思わない。

彼らの世話になるくらいなら、『死んだ方がマシ』なのだ。

琴子の両親は、そろって海外赴任している。家にはめったに帰つてくることはないし、帰ってきても、一時間も留まることはない。

俗に言つ、『仕事人間』なのだ。

互いを愛し合つてゐるわけでも、尊敬し合つてゐるわけでもない。彼ら夫婦は、互いのことを、『利害が一致したビジネスパートナー』くらいにしか考えていないのだろう。

そんな両親だからこそ、琴子に対する彼らの関心は、皆無に等しかつた。

物心つくころから家政婦に面倒を見てもらつていた琴子は、5歳になるまで、自分の母親は家政婦としてやつてきていたその人なのだと信じて疑わなかつた。

けれど、彼女は『母親』ではなかつた。

初めて自分の『母親』の話を聞いたとき、琴子は『母親』に会つてみたくなつた。幼稚園で、友人たちを毎日迎えにやつてくる『母親』。

小学校に上がつてからは、運動会や授業参観などで、『両親』に暖かな視線を向けられ、照れくさそうに笑う同級生たちが、うらやましくて仕方がなかつた。

琴子は、こまめに両親に連絡を取つた。毎日学校であつた出来事をメールしたし、遠足や季節の行事ごとで撮つた写真を手紙と一緒に送つたりもした。ただし、電話だけは家政婦から止められていたので、一度もしたことはなかつた。

『旦那様も、奥様もお忙しい方々ですから…』

そういうて、困つたように笑う家政婦の言葉を、琴子は重く受け取つていたのだ。両親を、困らせたくなつた。両親を、煩わせたくなつた。

そのかわり、彼らに認めてもらつたくて、彼らに構つてもらつた

くて、勉強やスポーツを頑張った。

優秀な成績をのこせば、彼らは自分を誇りしへ思つてくれるだろうか？

彼らは、自分に声をかけてくれるだろうか？

琴子は常に、そんな甘い幻想を抱いていたのだ。

幸い、習い事や塾、家庭教師などとこつた面で、両親は惜しみないほどの金を出してくれたので、琴子はできる限り何だってやつた。

おかげで、成績は優秀、スポーツは万能、ヴァイオリンやピアノ、絵画や英会話、果ては華道や茶道、田舞など、様々なジャンルに手を染めた。

けれど、彼らが琴子を省みてくれることは、結局一度として訪れなかつた。

琴子が中学を卒業するととも、琴子は両親に愛されたることを、『諦めた』。

無駄だ、と悟つたのだ。

結局、どんなに努力を重ねても、どんなに思慕を慕らせて、彼

「うは琴子を『愛して』は、くれない。

彼らは『好きに生きればいい』と琴子に言った。

有り余るほどの金を使って、けれど、自分たちの仕事に支障をきたさなければ、どこで何をしようと、構わないのだと。

中学の卒業式。

琴子は、受話器越しに始めて聞いた両親の声と、その言葉に、世界中でたつた独りきりになつたかのような、孤独感を感じた。

誰も、あたしを愛してはくれない。  
誰も、あたしを認めてはくれない。  
両親にすら、愛されないあたしを、他人がどうして愛してくれようか？

都内一の偏差値を誇る高校への進学を蹴って、琴子は自宅から一番近いそこそこの高校へ入学を決めた。

そのまま、適当に高校生活をすごし、適当な大学に進学し、適当な会社に就職し、適当な人間と結婚して…。

そうして、適当に生きて、適当に死んでゆくのだと。

そんなぼんやりとした未来を、琴子は見据えていたのだ。

響いたのは、鈴の音だった。

響いたのは、深い、深い声だった。

覚えているのは、長く伸びる、人の影と。そして

ちりん 、と耳に響いた音に、琴子はハッと顔を上げた。

同時に、沈みかけた思考を浮上させる。

竹林に囲まれた物寂しい小道は、バイト先への近道として常日頃から重宝していた。ほとんど人通りのないこの場所で、琴子はいつの間にか足を止めていたようだ。

ふと視線を走らせれば、夕闇に染まる砂利道に、長い影が伸びていた。

自分のものではない、他人の

。

どくん、と鼓動がひとつ、耳の奥で木霊した。<sup>じだま</sup>

(やだ、痴漢、じゃないよね…?)

動かない影を凝視する。視線を上げて、その影の持ち主を確認することが酷く恐ろしく思えた。

この小道は、明るい昼間に良く使用していて、こんなに薄暗くなつてから通つたことはなかつたのだ。

そう、人通りがない = 危ない と言うのは、昔からの不文律だ。琴子とて女なのだから、女としての危機感を持つていらないわけは無い。

だからこそ、普段は明るいうちにしかこの道は通らなかつたと言うのに。

（うつかりしてた…。考え方をしながら歩いてたから、気づかなかつたんだわ…）

未だ、どくん、どくん、と心臓は早鐘を打つ。

影は、動かなかつた。

いつまでたつても微動だにしない影を不審に思いつつ、もしかして自分の勘違いだったのだろうか、と微かに息を吐いた、その刹那だつた。

声は、恐ろしきほどに、低く。  
しかし、恐ろしきほどに、聞か覚えのあるものだった。

(え?)

聞き覚えが、ある?

否。

そんなはずは無い、自分は、こんな深い...深淵のよつたな声に、聞  
か覚えなどあるはずがなかつた。

けれど、そんな琴子の思考とは裏腹に、記憶の中で、自分の深い

とにかく、誰かが（もしかしたら、琴子自身が）それを否定しているような気がした。

そう、琴子は確かに、この声に全く聞き覚えがなく、しかし、酷く聞き覚えがあった。

視線をせわしなく彷徨わせ、狼狽する。  
訳が、分からぬ。

けれど、背筋を這いつるような恐怖と安堵が、同時に全身を襲つた。

（  
なに？）

この感覚は、何なのだろう？

混沌、と呼ぶに相応しい、陰と陽を織り交ぜたような、不思議な感覚だった。

かよつな…かよつな地に、おられたか

「

再び響いた『こえ』に、びくりと身体が強張った。  
ひゅーっ、ひゅーっ、ヒ、か細い呼吸が自らの喉から紡ぎだされ  
る。

息苦しい。胸が詰まる。歡喜と、悲哀。

なぜか視界が涙で歪んだ。

カタカタと小刻みに震える身体を、自身の両腕で包み込むように抱く。

そのまま、琴子は意を決して、影をなぞるように田線を上げた。

ゆづくづ。

しかし、確実に。

視線は、影から、影の持ち主へ。

「…」

息を呑むほどどの、戦慄だった。

(な、に…?)

『じく、ひとつ唾を呑み込んで、そのまま無意識に一步後退する。田の前に立るのは、琴子の身体の半分ほどの大きさの、『獸』だつた。』

そう、人の形をした影を持つその主は、けれど、人ではなかつたのだ。

夕闇に煌く、鮮やかな、セピアと翡翠のオッドアイ。その視線は真つ直ぐ琴子に向けられ、瞳の奥には滲み出る歡喜の色が窺える。姿かたちは、まるで豹か虎のようだ。

しなやかな手足と、長い尻尾を持つてゐる。ふんわりとした毛並みは、金に近い、琥珀色。

一見すれば、普通の動物にも見えるその獣の額には、鋭い一本の角が宙を貫いていた。

見たこともない、異形の獣。

(怖い…怖い、はず…なのに……)

じりつと、足元の砂利が音を立てる。

それ以上、琴子の足は、一歩とて動かすことができなかつた。

「主様…主様……、どれほど、お会いしたかったか…」

獣の瞳から、一粒、涙が零れ落ちた。

「つ…」

胸が、痛い。

獣が涙を零すと同時に、琴子の瞳からも、同じように涙が溢れた。

(なん、で?)

獣の悲しみが、痛いほど分かった。獣の喜びが、哀しいほど理解できた。

琴子もまた、獣に出逢えたことを、欣喜していたのだ。

これ以上ないほどの、恐怖を携えて。

ぼうぼう、瞳から、幾つも、幾つも涙が頬を伝つ。

「彼かの地へ、共に帰還致しましょう、主様…」

獣が一步、前へと進み出る。けれど、琴子の足は、自然、一步後ずさつた。

そんな琴子の行動に、獣は傷ついたよつて瞳を搖り出す。

「 い、いめん…」

声が。

無意識の内に、獣に謝罪の言葉を紡ぐ。

「あたしつ…行きたいけど…行けない…」

半ば、叫ぶように言えども、獣がびくりと身体を震わせる。

「ずっと…ずっとあなたに会いたかった…。けど、会いたく、なかつたよ…つ、  
つたよ…つ、  
ティーダ…」

鳴咽と共に零れた言葉に、獣も、そして琴子自身も、瞪田した。  
そつ…、獣の名は、『ティーダ』だ。

きりつと、鋭い痛みが、頭に響く。  
痛い、痛い、痛い…！

頭が、割れそりだ。

「ひ…？」

立派へべりて、困り困難で、思わずその場に座り込む。

「主様…」

獣が叫び、一ひらへ駆け出した。

しかし、琴子は去えるよつて瞳を瞪る。

「来なこで…！」

そり、来なこで。…来なこで。

「そつちこは、行きたくない…。…行きたくないの…。…」

喉から搾り出した悲痛な声に、獣が再び、瞳を搖らす。  
困惑、戸惑い、躊躇い。

けれど、すっと向けられた真っ直ぐな視線が、決意に満ちて

(ダメ )

獣は、自分を連れてゆくだろう。

漠然と…、琴子は自身の直感に戦いた。

ズキン、ズキン…。

鈍い痛みは、未だ、衰えを知らない。

「主様…どうぞお許しください…、時間がないのです」

一步、一步、獣が琴子へ歩み寄ると同時に、痛みはますます鋭さを増す。田を開けることすら苦痛で、琴子は硬く瞼を閉じた。意識が混濁する。眩暈と吐き気が、琴子を襲つた。

硬く閉ざした瞼の奥。

漆黒の闇の中、石造りの冷たい部屋が浮かぶ。

天蓋付きのベッド。アンティーク調の家具。小さな小窓に揺れる、カーテン。

窓の外に、ゆつたりと立ち上る、黒煙と

ダメ、コレイジヨウ見テハイケ

ナイ！！

真っ赤なシグナルが。

(う……！……！)

警鐘を鳴らした。

ふと気がけば、田の前に気配を感じる。

おや、あれ、あの獣なのだな、遠かかる意識の中で琴子はぽんやりと語った。

(もうっ、ダメ……)

痛みが絶頂を迎えた、その刹那。

ふつと、額に暖かな吐息を感じる。同時に、あれほど酷かつた頭の痛みが、すっと溶けるようになくなつたことに、琴子は喫驚した。驚きに田を丸め、眼前の獣を見据えようと顔を上げる。けれど、途端、目映い光の洪水に襲われた。

ちりん、とうとう、鈴の音が耳の奥に響く。

同時に、琴子の意識は、漣のよつよつと遙のこへいった。

「何を、していた？」

暗闇に響いた声が幾重にも反響し、ふと、獸…ティーダは視線を上げた。

冷たい石畳の牢獄の鉄柱越しに、黒衣に身を包んだその影は、ゆつたりと笑みを浮かべている。

緩やかな曲線を描く身体は、黒衣の影が艶かしい“女”であることを示した。

胸元に流れる髪は、アメジストよりもなお深い、紫紺。赤い、紅い、朱い、その脣が一層闇に映えた。

鮮やかに濡れた色に嫌悪を抱き、ティーダは目を細めると顔を背ける。まるで、その姿を視界に入れることすら、拒むようだ。

そんなティーダの態度に、黒衣の女はくつくつと喉を振るわせた。

「お前、本当に面白こよ。わたしの結界を、精神を切り離すことで潜り抜けたか

」

「言つて、ふと視線をティーダへ流す。

「やつして、よひやくの地へ帰つてこられたのだろう? お前の  
可愛い主は…」

その言葉は、ティーダを激昂させるには十分だった。  
凍るような冷たい視線で、ティーダは女を睨みつける。

「黙れ、千の民に背を向けた愚かな裏切り者よ……。ぬじい」ときが、主様を語るか。愚にも付かぬわ！」

「喰らい付くよつに声を荒げたティーダに、けれど女は、更にくつくつと嗤笑した。

「おお、怖い……。けれど、今のお前に何ができるよつ、力を封じられた今のお前に、何が？」

「黙れ！」

「ああ、黙りうつとも。せいぜい、そこで指をくわえて待つておいで？　お前の可愛い主が、わたしの愛しい主人の下へ墮ちるのをね……」

くつくつ、くつくつ。

闇に浮かぶ女の瞳は、ティーダと同じ、セペアと翡翠のオッドアイ。

女は双眸を細め、笑い声は、牢獄の宙に響いて消えた。ティーダは、未だ、女の消えたその位置を睨みつけたまま、顔を歪める。

ぎりりと、噛み締めた牙が音を立てた。

世界は混沌に満ちている。

そうして。

『神子』<sup>みこ</sup>は、よつやくこの地へと舞い戻られたのだ

「え？」

気が付けば、田の前には鬱蒼と生い茂る木々。

舞い戻った意識に、琴子が発した第一声は、そんな呆然とした咳

きだつた。

未だ見開いたままの瞳を左右へ動かし、辺りを見渡す。しかし、依然として目に映るのは青々とした木々のみで、他は何も見当たらなかつた。

(起きればいいんだよね、あたし…)

ふと、自分が仰向けに横たわったままの格好であることを、琴子は思い出す。これでは、いくら視線を動かそうと、見えるのは木だけで当然だった。

(……何か、バカみたい)

なんとなく恥ずかしくなつて、琴子は小さく息を吐いた。そして、腕に力を入れると、身体を起こそうと試みる。が、刹那、頭に鈍い痛みがはしつた。

「つ…！」

低く呻き声を上げ、顔をしかめる。

自分は今まで一体何をしていたのだろう？

腕を額に当て、眉間に軽く摩りながら、順を追つて思い出をつと記憶を探る。

(あたし、確か……)

異形の獣に、小道で出逢つて…

琴子はそこで初めて、はつと瞳を瞬かせた。

そのまま、慌てて起き上がつて、周囲に目を走らせる。頭の痛みは、もう微塵も気にならなかつた。

右から左へ、左から右へ。けれど、獣の姿はどこにも見当たらなかつた。

「いな、い…？」

なんだか、酷くがっかりして、けれど同時に、琴子は安堵のため息をついた。  
それにしても…。

「 ジー、ジー…？」

不安気に身体を自らの腕に抱き、琴子は改めてぐるりと辺りを見回した。

周囲を囲むのは、深い深淵に包まれた木々。背丈を軽く越す大木ばかりで、じつじつとした幹は縦横無尽に地面を走っている。  
根元には無数に「ケが生えていて、長い歳月を感じさせた。  
よほど深い森の中なのか、空気が冷たい。上を見上げてみれば、  
大きな枝から伸びる数多の葉が光を遮り、そこに存在しているはず  
の空をも隠している。

そうして、葉の隙間から零れる僅かばかりの月光は、森の中に無  
造作に光の線を描いていた。

「……だれか、いないの？」

呴いた言葉は、酷く小さく、けれど周囲に木霊する。  
ありえない。先ほどまで、琴子は確かに竹林の小道にいたはずだ。  
それなのに、何故いきなりこんな森の中で倒れているのか…。  
ふつと浮かんで消える、あの獣の姿…。

( まさか… )

自分は、あの獣に…”ティーダ”に、連れてこられたのだろうか?  
無意識の内に、琴子自身が『行きたくない』と拒絕した、その場

所へ。

胸を徐々に不安が覆い、思考は悪戯に混乱する。

（と、とにかく…、人を探そう…）

ひとつ頷いて、琴子はゆっくりと立ち上ると、歩き始めた。行く先も、方向すらわからない。けれど、このままでは気が狂つてしまいそうだった。

道は、まさに”獣道”と呼ぶに相応しいものだつた。歩き始めて數十分後には、琴子の息は既に上がつてしまつていた。光を閉ざされた森は、暗闇の中を歩くようなもので、幾度となく樹木の幹に足をとられ、琴子は転倒する。その度、手足を擦り剥き血が滲んだ。

けれど、どれほど傷をつくるつとも、どれほど息が上がるつとも、琴子はその歩調を緩めようとはしなかつた。一刻も早く、人に会いたかったのだ。

獣の咆哮も、虫の音すら聞こえないこの森は、どこか異常だつた。

それが、琴子には何より恐ろしく感じた。

そうやって、数時間歩き詰め、もはや琴子は身体中を痛めていた。  
数度目の転倒で足首を捻り、跛ひきをひいている。

手足も、顔も、高校のセーラー服も、泥と血で汚れていた。

次第に意識が遠のきそうになるのを、何とか気力だけで繋つなぎとめる。

なだらかな傾斜の下に暖かな光を見つけたその時、琴子はついに、  
安堵の溜息と共に、その意識を手放していた。

重い身体を、地面へ投げ出して。

「あ、ようやく助かったのだ、と。

そんな優い、想いと共に。

かる一く残酷描[クレ]込みます。  
苦手な方はお[ク]をつけて下さい。

「琴子ー、リーとーーー、リヒ、おきるー、琴子つてばーーー、  
つ?ーーー」

耳元で煩いほど響いていた聞き覚えのある声に、琴子は身体を跳ね上げ、飛び起きる。

(あ…れ?)

「…」

呆然としたまま、辺りを見渡す。田に映つたのは、日々通いつめている、高校の教室だった。

田の前には、啞然と固まつたままのクラスメイトの姿。

「なに…? なんて顔してんの、あんた…」

呆れたような彼女の声すら、琴子の耳には届いてはいなかつた。

「え…? ゆ…め?」

夢? 夢だつたのだろうか?

あの異形の獣も、あの不気味なほど静かな森も。

すべて、夢

?

どく、どく、どく、と不自然なほど早まる鼓動が、次第に収まつて。ふつと、身体中から力が抜けた。

「——ヒー？ オー？ 帰つておこでー？」

ひらひらと眼前で手を振るクラスメイトに、思わず抱きついて。そうしてそのまま、琴子は思い切り声を上げて泣いた。

「——琴子お？！ なに、どうしたの、あんた！」

「よ、良かつたよお……っ！」

良かつた、良かつた、良かつた……夢で、良かつた

——！

「起きる……。」

バシャン、と冷たい何かが、顔を濡らす。

「つ？！」

あまりの冷たさに、琴子は思わず、ハッと目を見開いた。

（ ああ… ）

そうしてすぐこ、理解する。

（ ああ…、夢は、あつちだつたんだ… ）

突きつけられた現実に、思わず瞳に涙が滲んだ。硬い土の感覚が、妙にリアルで、琴子は息を詰まらせた。そしてふと、自分が今、地面に横たわったままの状態であることに気づいた。

慌て立ち上がろうとすれば、身体は言つことをきかない。怪訝に思つてみれば、腕が一人の男によつて固定されていくことに驚愕した。

（ え？！ な、なに…つ？ ）

ついで、辺りに視線を走らせる。同時に、その光景に息を呑んだ。

地面に倒れ込んだ琴子を囲むように、辺りに佇む、人、人、人。古臭い、煤けたような簡素な服に身を包んだ彼らの手には、松明と共に、犁や鍬などの農具が握られていた。

大人も子供も、男も女も、ゆらりと炎に翳る彼らの目は、一様に血走っている。

琴子を見据えるその視線は、どこまでも暗く濁り、嫌悪も露だつた。

ぞつとする。

生まれてこのかた、こんなにも、悪意と敵意と、殺意に満ちた目を向けられたことなど、一度としてなかつた。

恐ろしいまでの負の感情が、琴子の喉元に鋭い刃のよみに当たるべて、恐ろしいまでの負の感情が、琴子の喉元に鋭い刃のよみに当たるべて、恐ろしいまでの負の感情が、琴子の喉元に鋭い刃のよみに当たるべて、恐ろしいまでの負の感情が、琴子の喉元に鋭い刃のよみに当たるべて、

自然、恐怖で力タカタと全身が震える。

「目覚めたか、死を呼ぶ神子よ」

ふと、視線を声の礎である正面へ向ける。

そこには、薄暗い外套に身を包んだ老婆の姿があった。

幾つも腕に重ねられたブレスレット。様々な形に彩られた指環。

ジャラジャラと独特の音を立てるネックレス。折れ曲がった腰を支えるような木の杖を片手に、老婆は一層仄暗い視線を琴子へ向ける。

老婆の周囲には、老婆を守るように数人の男たちが佇み、そのうちの一人の手には、空の桶が握られていた。ああ、あれで水をかけ

られたのか、と。琴子は鈍く動く頭のなかで、理解した。

そんなことは、どうだつてよかつたのだ。

やつ、何より氣になつたのは、そんなことではなくて…

「死を呼ぶ神子…？」

ぼつり、声を零す。

そう、確かに、この老婆は琴子に向かつて、『死を呼ぶ神子』とやつ言つたのだ。

初めて声を上げた琴子に、周囲が警戒するよつて、人々の農具を掲げる。

老婆はすつと田を細め、琴子はそんな周囲の反応にびくつと身体を竦ませた。

「やつ、お前は正しく『千年の神子』。その闇色の髪、その黒曜石の瞳、違えるはずもない。この国に、この田に、死を呼ぶ神子さ

(千年の、神子…?)

なんなのだ、それは。  
見たこともなれば、聞いたこともない。

「な、なにを言つてるの？ 变な格好して、頭おかしいんぢやないの？！ だいたい、あたしはそんなんぢやない… つ！ 千年の神子なんて、知らない…！」

思わず叫べば、途端、老婆の側に佇んでいた一人の男が琴子に水をかけた男だ その手の桶を琴子に向かつて投げつけた。

驚き、慌てて身体を竦めたが、桶は琴子の右頭部から右肩にかけて命中した。

ガン、と高い音が響いて、痛みに小さな悲鳴を上げる。

「てめえ、見え透いた嘘を…！ 大婆様、一刻も早くこの娘を天帝へ供物として奉るべきだ…！」

（くも、つ…？）

どういふことだらうか？ どこかで聞いたことのある言葉だと思つた。そう、あれば、近所の神社で、祭りをやつていた頃の…。

「今しばらくお待ち。じきにたそがれの時はやつて来る。明けの明星と共に、この娘は天帝へ捧げる」

そう。

その、意味するとこるは

「死を呼ぶ神子の、血と、肉と、魂をもつて。この国の未来を、守るのを」

血と、肉と、魂を、もつて…？

「娘は、夜明けと共に

殺す」

（う、そだ…）

果然と、驚愕に田を見開いて。

「ひうす？

殺すつて、ナニ…？

「ねえ…、ちよつと、やめてよつ…じょ、[冗談でしょ]つ…殺す、  
なんて…！」

震える声を搾り出し、老婆に向かつて叫ぶ。

けれど、老婆は目を細めただけで、小馬鹿にするよつて零子を見  
据えた。

「冗談？ 馬鹿をお言いでないよ。神子は死を呼ぶ。國を腐敗へ導  
く。だから、神子は殺す。これは、この國の意向であり、定石さ」

「国つて……それこそ、馬鹿言わないでよッ!!」ここのは日本でしょう?!! 殺人は犯罪よ! あたしは何もしてない! 意向も定石も、ないじやないつ!! これ、なにかの撮影とかでしょ?!! だつたらいい加減にしてよ!!」

「お前は何を言つていのさね。こゝはお前の言つ國でない」

取り乱す琴子に、老婆は冷たい瞳を向けて淡々と言葉を紡ぐ。これ以上は、聞いてはいけない、と、どこかで警鐘が鳴った。

「」は西の大陸の二大大国のひとつ、聖王国レジエンド

違  
う。

「そしてお前は、千年の神子」

違う、そんなはず、ない！

「世界を闇へ導き、國を腐敗させ、邑を死に至らしめる」

そんなはず、ない！！！

「そう、死を呼ぶ神子

L

「違うッ！ そんなはずない！！ 全部嘘だ！！！ 嘘だ、嘘だ！ あたしは違う… そんなのじゃない… ちが…」

勢い良く身体を起こし、老婆に食つて掛かる。

刹那、ガツツと何かが米神に当たつて、琴子は衝撃に身体を倒した。

(な、に…?)

呆然と、瞠目した。地面に、ポツリ、ポツリ、と血が滴り落ちる。目の前に転がる拳ほどの大ささの石を、投げつけられたのだと気づいた。

怒りと、屈辱と、恐怖と、困惑で、身体が震える。ゆっくりと、石が投げつけられた方向へ顔を向けると、真っ直ぐな視線とから合つた。

(いじ… も…?)

視線の先に、おそらく十にも満たない少年の姿が窺えた。

「お前のせいで、父ちゃんが死んだんだ…！」

(なにを、言つてゐるの…?)

息を呑む。少年の瞳は、憎しみと憎悪に満ちていて。一瞬たりとも、田を逸らすことなどできなかつた。

そんな少年の言葉を皮切りに、辺りを取り囲む他の村人からも、次々と恨み言の声が上がる。

うちの家畜が昨日死んだ。あの娘のせいだ。

うちの妻が病に倒れた。あの娘のせいだ。

うちの作物がみんな枯れた。あの娘のせいだ。

殺せ。殺せ。殺せ。殺せ！

死を呼ぶ神子を。闇色の髪を抱き、黒曜石の瞳を秘めた、千年の神子を。

「ち……ちがう……」

幾つも、幾つも、四方八方から、琴子に向かって石は投げられる。腕を掠り、脚を打撲し、背中に傷をつけ、頬を切る。

流れ落ちる血にも目を留めず、村人たちの瞳は、どこまでも暗く、暗く、暗く、闇に染まっていた。

「あたしは、違うっ！……」

腹の底から、そう叫んだ、まさにその刹那のことだった。

「ぎめああああああああ！」

琴子を囲むように円になつた人垣の、一番後ろから、低い悲鳴が木靈する。その場にいた全ての人間が、驚愕と共に、一斉に声の手の方向へ視線を走らせた。

「なに」とだー!?  
「どうした?ー!」

老婆と、周囲の男たちが叫ぶ。

彼らの声に、ぱつと人垣が割れ、その先に、地面に俯けに倒れた人影が見えた。その背中から、『なにか』が生えている。

否。

そうではない。

琴子は刹那、息を呑んだ。

（生えてるんじゃない…つ、あれ、”矢”だ…）

ドラマや、歴史の教科書で見た、弓矢の、矢。田を開いたまま、背中に矢を受けた男は、既に絶命しているように見えた。

地面に広がる黒い染みは、男の血であるのだと。

どくん、と鼓動が早まる。

初めて見た『死体』だった。

果然と固まる琴子と村人たちだったが、不意に、ドッドッドッ…と低い、土を蹴る音が耳につき、ハツと顔を上げた。

『馬』だ。

琴子がそう理解すると同時に、誰かが高々と叫び声を上げた。

「ち、山賊だああ――!――!」

残酷な描写を含みます。  
苦手な方は注意して下せご。

「さ、山賊だあ——！——！」

言ひが早いが、気づいた時には、森の端から馬を駆る多くの男たちが映つた。彼らは一様に、獣の皮を上着代わりにはおり、肩や、胸、肘に甲冑をつけ、口元にやりと薄汚れた笑みを浮かべている。手に持つ武器は様々で、村人たちのような『農具』ではなく、人や獣を殺すために作られた、剣や弓や槍が主だつた。

弓を持った数人が、家々に火矢を射る。炎はたちまち大きくなりを上げ、辺りを包んだ。

「いいかあ、てめえら——！——若い女は殺すんじやねえぞ！」

頭目と思しき山賊の一人が叫ぶと、猛々しい雄叫びが四方から上がつた。

一人、逃げ惑う若い男が応戦しようと簡素な剣を構え、けれど山賊は、剣ごと男を切つて捨てる。

一人、荷物を抱えた老婆が、地を這い、せぐくまに蹴り逃げる。その背中を、その心臓めがけ、山賊は何の躊躇もなしに長い槍で突いた。

一人、幼い少女が、もうすでに事切れた父親の手を握り締め、慟哭する。その首を、山賊は豆腐でも切るかのように、すっぱりと、いつそ鮮やかだと言わんばかりにもぎ持つた。

山賊たちの誰しもが口を歪め、笑っている。瞳は濁り、暗く深淵に包まれているようだと、琴子は戦慄した。それは、ただただ、殺戮を楽しむ残虐な殺人鬼のようだ。

狂ってる。

背中を、ひんやりと冷たい汗が一筋流れた。  
琴子は一、二歩後ずさり、そのままぺたんと地面に倒れるよつに座り込む。

「お、お前のせいだ！－！」のつ、死を呼ぶ神子－－」

不意に、それまで琴子の腕を掴んでいた村人の男が、取り乱したかのように手に持っていた鍔くわを掲げた。

「つ？－」

男の目は血走り、正氣の沙汰ではない。  
頭の中は真つ白い。男の瞳に滲む殺意が、どこまでも恐ろしかった。

震える両足を叱咤して、慌てて立ち上がるつとするものの、身体は硬直し、言つことを聞かない。

殺される。殺される。

殺されるツ－－

硬く瞼を閉じて、身体を竦める。

そうして、死を覚悟した、その時だつた。

“じとり、と”何か”が地面に落ちる音が聞こえた。

(な、に…?)

恐る恐る、瞼を開く。視界に、男の持つていた鍬が目に付いた。あの”音”は、鍬を落とした音だつたのだと気づき、更に琴子は無意識に目線を上げた。鍬の先に、男の腕が見えた。

「ひつ……」

悲鳴が喉につつかえる。

男は、目を見開いたまま胸から刃を生やしていた。

死んだ魚のように、虚空を見据える双眸。唇から、一筋、真っ赤な血が零れ落ちた。ズツと肉が刃に擦れる音が嫌にリアルだ。そのまま、男の背後から、男を貫いた山賊は、その刃を一気に引き抜いた。

途端、男の胸の空洞から、琴子に向かつて暖かな雨が降り注がれた。

血…？

瞬きすらできず、呆然と一連の行動を見据えた。

鉄の匂いがあたりに充満する。震える手で、そつと自身の頬をなぞれば、紅の鮮血がべつとりと指に絡みついた。

「あ…あ…あッ…！…！」

全身が恐怖で威竦み、視界が涙で滲む。

怖い、怖い、怖いッ…！！

酷い匂いに、今にも眩暈を起しそうだ。

こみ上げる吐き気を抑えきれず、琴子は躊躇なく、傍らに嘔吐した。

数度咳き込んで、全てを吐き出しても、胸を襲う氣持ち悪さは取まることはなかつた。

「いやあ、悪い」としたなあ

ふと、耳に低く響いた声に、琴子は反射的に「ひつ」と小さな悲鳴を上げる。

にたり、と唇をゆがめ、山賊が囁つた。

山賊は、琴子を上から下まで、舐めるよじて見据え、笑みを深める。

背筋に、ぞくりと悪寒が走った。

危険、危険、危険……

真っ赤なシグナルが、警鐘として、琴子に伝える。

逃げなければ。

殺されるより、もつと…もつと酷い、もつと恐ろしい目に遭うのだと。

理解した途端、それまでの硬直もかなぐり捨て、琴子は駆け出した。背後から、「おいおい、逃げんなよ」と低い声が木霊し、琴子を震え上がらせる。

数メートルも走らない「ひ、ひ、ひ、ひ」、琴子は馬に乗った男に追いつかれ、退路は完全に絶たれた。

(怖い、怖い、怖い……)

「やうがえるなよ、これからたっぷり、お楽しみの時間なんだ……」

馬から男が下りた。

半月に細められた、男の双眸と、緩やかに弧を描く、口元。

「い、来ないでッ……」

両手で胸元を握り締め、恐怖に震える。

「逃げるなよ。すぐ良くなっちゃるからよ」

にたり、男の卑下た笑みが深まつた。

そして、伸ばされた手のひらに、腕を掴まれる。

「い、やだっ！… わらないでッ！…」

悲鳴とも、叫びとも覚束ない金切り声を上げて、琴子は反射的に男の手を叩き落した。途端、男の顔が怒りに歪む。

「…」

56

言ひが早いが、渴いた音が空に響き、琴子の頬に、痛みが走った。殴られたのだ、と。

あまりの衝撃にバランスを崩し、その場に倒れこむ。たつた一発殴られただけで、脳震盪を起こしそうだつた。ジーン、と耳鳴りが止まない。

「大人しくしてりやあ、痛い目をみずこすむんだよー。」

そう怒鳴ると、男は琴子に覆いかぶさつた。

首筋から、鎖骨へ、ざらりとした生暖かい感触が走る。身体中を、さくられだつた指が這つた。

「ひつ…！」

（い、やだ…）

怖い、気持ち悪い、誰か…！ 誰か、誰か、誰か…！

わき腹から、胸元へ。

太股を撫で上げる指。耳元に感じじる、荒い息。

「やあああああつーーーー！」

もがいて、叫んで、手足をがむしゃらに動かして。その度、男は激昂し、琴子を殴った。山を歩き回った時にできた傷も、村人たちに石を投げられてできた傷も。裂けて、開いて、血が滲む。けれど、琴子はそれすらも気にならず、ひたすら暴れ続けた。

恐怖と、気持ち悪さに、涙が溢れてとまらない。

（誰か、誰か…！… 誰でもいいから、お願…ッ…！）

「誰かッ

」

いいねお前の国ひでない

叫んで、ふと脳裏に蘇った老婆の言葉に、声が途切れる。ただただ、琴子は涙の溜まった双眸を驚愕に瞠つた。

(『誰か』って、  
だれ?)

そうやって、『誰か』に助けを求めて。  
けれど。

結局、『誰か』なんていないことになづく。

だつて、ここは琴子の知る『日本』ではない。知らない世界。知らない国。知らない人。

やつ、お前は正しく『千年の神子』

浮かんで。

世界を闇へ導き、国を腐敗をも、命を死に至らしめる

しめる

震んで。

「この国の未来を、守るのを

重なつて。

てめえ、見え透いた嘘を—！

幾重にも。

神子は死を呼ぶ。

幾重にも、幾重にも。

お前のせいでの、父ちゃんが死んだんだ—！

やめっこ、はなれない。

夜明けと共に、

殺す。

(……ああ、そつか)

る せ !!!

殺 せ 殺 せ 殺 せ

こ

そうか。…そう、だつたんだ。

(誰も…)

そう、誰も。

「誰も、助けてなんて、くれない…」

小さく。

たつた、独りきりなのだ。

「たすけてなんて、くれないのよ…」

小さく、呟いて。

ふつり、

琴子の中で、何かが途切れる音が聞こえた。

残酷な描<sup>ク</sup>画<sup>ク</sup>を含みます。

苦手な方はお<sup>シ</sup>みをつけて下さい。

助けを、求めていたのだ。

(誰か…！！)

助けてくれるのならば、天使だって悪魔だって。

(誰か、誰か…！！)

何だつて良かつた。

(誰でもいいから

！…！)

けれど。

( もう 、 結局 『 誰か 』 なんて 、 い の )

「 誰も 、 助けて なんて 、 くれない …… 」

小さく。

けれど、琴子はたつた独り。

「 たすけて なんて 、 くれない のよ …… 」

小さく、呟いた。

ぬめり、とした独特の感覚が、琴子の両手を覆つた。

静寂の中に、不協和音。

ズツ、  
と。

まず目に入ったのは、男の驚愕の表情で。

「…………て、めえ……？！」

唸るような低い声と、憎しみに満ちた濁った双眸が、衝撃に見開かれた。

「……ツ」

その瞳の恐ろしさに、琴子は更に深く、両腕を男の脇腹へ突き入れる。

深く。深く。深く。

自らの手に握られた小刀は、男の腰に据えられていたもので。一つと、刃からてのひらに、血が滴り落ちる。  
ぱつ、ぱつ、ぱつ。

柄に至るまでに地面に呑みこまれる赤黒い鮮血。

まるで、全ての時が止まってしまったかのような独特の沈黙の中、辺りに鉄の匂いだけが漂つた。

しかし、次の瞬間、琴子は勢い良く男の身体を押しのける。

「ぐつ……？！」

低い呻きと共に、男は仰向けに倒れた。唇の端から、血塊が溢れる。

男は酷く緩慢な様子で、腹に手を当て、琴子を睨み付けた。

「……い、の……な、めやがつて……！」

地面に大量の血が滲む。男はしかし、怒りを糧によりめきながら

も立ち上がった。ぎりっと歯をかみ締める音が聞こえる。

そのまま、男は震える手を呆然と固まる琴子の細い首に伸ばす。

「――」

声なき悲鳴をあげ、次の瞬間、琴子は握り締めた小刀を振り上げていた。

で響いた。

ザンッ、と鈍い音が闇夜の森の中

何度も。何度も。何度も。

硬く握り締めた刃を、振り上げては振り下ろし、それをひたすら繰り返す。

その度、血飛沫が辺りを濡らし、琴子を染め上げた。

紅く。赤く。朱く。

緋く。

数十回、男を刺し貫いた後、琴子の手からよじやくへ小刀がするりと地に落ちた。目に映る男は、胸に数多の穴を空け、琴子を睨み据えたまま、既に事切れていた。

「はつ、はつ、はつ……」

今更ながらに、動悸がする。

緋に染まる自らの両手を、ただ、呆然と見つめた。肉を裁つその感覚が、指にこびりついて離れない。

人を、殺したのだ。

他でもない、琴子自身が。

「ツ、う……！」

喉の奥から、再びこみ上げてくる吐氣。傍らの樹木に身を預け、その場で数度えづく。けれど、出るのは胃液だけで。

(「ひ、した……？」)

あたしが……？

既に事切れた、男は。

動かない。  
喋らない。

鼓動は止まっている。

琴子を襲うことも、一度と無い。

それこそが、抗いようのない現実で。たった一つの、真実で。

辺りに充満する、錆びた鉄のような血の匂いに、眩暈をおこしてやうになる。

分かつてゐる。

後戻りなど、もう、できはしないのだから。

「ふツ……う……ああ」

喉の奥が熱い。嗚咽が零れる。頬を伝い、涙が幾つも幾つも溢れた。

どうして、こんなことになつたのだろうか？

何をしたわけでもない。

変わらない毎日を、安穏な日々を、そして、ただただ、適当な生を生きてゆくのだと、思つていたといつのこと。

甘い夢は、もう終わり。

ここには、天使なんていない。

ヒーローだって、いない。

物語のように、助けてくれる騎士も、王子様だって。

誰もいない。

だから

「ツ……つ……あ、ああ……」

全身から力が抜けて、地面に座り込む。赤く染まった、震える身体を、両手で握り抱いた。

もどれない。  
もう、もどれない

脳裏に、大嫌いだった、あの世界が  
消えた。

浮かんで、

あれからどれほど泣き続けたのだろうか。空が明るみを増してきていた頃だった。

遠くで馬の嘶きが聞こえ、琴子は息を呑んだ。

一頭のそれではない。

( いの男の、仲間の、山賊……？ )

思に当たった予感に、琴子はふりつゝ両足を昂らし、立ち上がった。

いのままここにいては、確実に見つかる。やうすれば、今度こそ唯では済まないだらう。

ひとつ、深呼吸。そつと涙を拭うと、琴子は足元に転がる血に塗れた小刀に目を留めた。

未だ、身体は、膝は、指先は、恐怖に震えているけれど。

( それでも…… )

涙が滲む視界で、きゅっと唇を噛み締める。

かすかに震えの残る、冷たい指先が小刀に触れて。力チャリ、と小さな音がした。

（それでも、あたしは…）

生涯消えることのない、罪を、咎を、背負い。

けれど、それでも。

今は、この小刀が何よりも琴子にとって、必要なものなのだ。

そう。

生き抜く、ために。

既に事切れ、微動だにしない男を、琴子は再び見つめた。

誰かを殺めて、それでも、生き抜きたいと願う自分は、愚かだろうか？

双眸が、躊躇いに揺れた。

しかし、すぐに視線をそらすと、琴子は音を立てないよつこその場を後にした。

どちらへ進むかすら分からぬ状況で、けれどひたすら、琴子は道なき道を歩き続けた。

幸い、人にも、獣にも出逢うことはなく、途中、小さな小川の水で喉を潤し、樹木の根元に転がる甘い匂いの果実で空腹を補つた。

琴子がその森を無事に抜け出したのは、歩き続けて五日後のことだった。

僅かに切り立つた斜面の向こうに、簡素な家が見える。そこは、小さな農村のようだった。

数棟に満たない萱葺屋根の家々。柔らかな風にゆれる、白いシーツ。中年のふくよかな女が、子供と唄を歌いながら木の実を拾っている。

もはや琴子の体力は底を尽き、血と泥に塗れた身体は、至る所がぼろぼろで、立っていることすら不思議だった。

けれど、琴子は彼らに助けを求めるとは愚か、声をかける氣すら持ち合わせてはいなかつた。

（あたしは、異質だ……）

先の村で、老婆は言ったのだ。琴子に向かって、『この国に、死を呼ぶ神子』であるのだと。

”この国”と言つからには、おそらく他にもいくつか国が存在するはずだ。そして、国境といつのは、必ず何らかの検問を行つているはず。

だとすれば、未だ何の検問も受けていない琴子は、先の村の老婆が言つ”この国”から抜けてはいないはず。

つまり、先の村と同じ鉄を踏む可能性が高いのだ。

そう、『殺される』という、鉄を。

『ぐくりと喉が鳴る。

軽く視線を彷徨わせ、微かに震え始めた身体を自らの両手で抱きしめた。

ここへ来てから、よく自分で自分を抱きしめている気がして、琴子は自嘲気味に笑つた。酷く自分が滑稽に思えたのだ。

琴子はふと思いつて、物干し竿の側の籠から、黒い外套を失敬した。『死を呼ぶ神子』は、黒髪に黒い瞳だと老婆が言つていたのを思い出したのだ。それを頭からすっぽり被り、農村に背を向ける。行き先なんて、知らない。

けれど、歩き続けるしか道はないような気がした。

最初の村から、歩き続けて数十日が経つた。もしかしたら、すでにひと月を越えているかもしれないが、琴子は歩き始めて十五日後には、日を数えることを止めてしまつたので、詳しい日数は分から

なかつた。

そうして、途中いくつかの森を抜け、高原を進み、数多の村や町を通り抜けた。夜は出来るだけ民家の側で寒さをしのぎ、昼は獸道を身を隠すように進んだ。森で野宿したときは、野党や山賊、獸に怯えながら、一晩中寝ずに息を潜めて過した。数度、彼らに遭遇しそうになつたが、慎重に歩を進めていたことが幸いし、なんとか見つかることなく切り抜けた。それはまるで奇跡だと思つた。

そうして歩き続けて行く中で、この世界の成り立ちも、なんとかく分かつてきた。場所によつて、人の数もその生活水準も異なるもの、ここに存在する人々は皆一様に歐米人種のようだつた。

すつと高く通つた鼻筋に、ぱつと目を惹く大きな瞳。顔立ちはくつきりとしており、アジア系の容貌をした人間は今の所見かけていない。琴子がもといた世界との違いと言えば、髪や瞳の色が明らかに異質であることくらいだ。さめるような鮮やかな緋色の瞳を持つ者もいれば、深い湖を模したかのような、藍の髪を持つ者もいる。はじめて出逢つた村人たちが、茶髪に茶目・金髪に碧眼など、オーソドックスな色合いであつたから気づかなかつたのだが、それはまさに多種多様であり、眩暈を起こすかのような艶やかさだつた。

更に、彼らの纏う洋服は、色とりどりのデザイン性に優れたものでは決して無かつた。それはどれも、簡素で素朴で、…そしてどこか古めいていた。同時に、服装に比例するように技術もまた然りであつた。

琴子が歩んできた道程の中で、それなりに大きな町はいくつかあつたが、それでも夜になれば人々は街灯ではない仄かな蠅燭の灯火を目印として行動をするし、昼間は洗濯機の代わりに洗濯板を使って川や井戸の水で洗濯をし、かまどで焼き物を調理した。

そして、追い討ちをかけるように、ここには盜賊もいれば山賊もいる。最初の村での、あの恐ろしいほどの惨劇すら、日常の一齣として受け入れられているのだ。

ここでは、人はあつけないほど簡単に命を落とすし、人は自己を守るためにその手を血に染めることを厭わない。

まるで、ゲームが漫画か小説か。はたまた映画のようだ。正直、笑い話にもならない。

さらに最悪なことに、数多の色を有するこの“世界”で、しかし『黒』という色を持つ者は幾人にも満たなかつた。しかも、そのほとんどなどが高貴な者の『奴隸』であつたり、村や町のスラムではみ出し者として蔑まれていたり……と、碌な扱いではない。

外套を頭からすっぽり被つてどうにか難を逃れている琴子は、自分の選択の正しさに改めて安堵した。この髪と瞳を陽の下にさらして見せれば、数刻もしないうちに捕らえられ、殺されるのである。何故なら、髪と瞳の両方に『黒』を持つ者を、琴子は未だ目にしたことになかったのだから。

またしても、老婆の深淵を這つのような声が蘇り、琴子は軽く頭を振つた。同時に、疲労と空腹と、全身を鈍く襲う痛みで、気が遠のきそうになる。

そう、お前は正しく『千年の神子』  
その闇色の髪、その黒曜石の瞳、違える  
はずもない

この国へ、この町へ、死を呼ぶ神子さ

老婆の声が、いつまでも耳にこびりついて、離れようとしなかつた。

歩き続けて、さらに数十日が経つた。琴子が辿り着いたのは、今まで一番大きな、都市とも呼べる街だった。

城門から一直線に大通りが通つて、その両端に数多の店が並ぶ。美味しそうなスープ、芳しいパンの匂い。果物や野菜などの食べ物から、色とりどりの布やキラキラ輝く宝石まで、店の種類は実際に様々だった。

真っ直ぐ伸びる道の正面には、白亜の宮殿がその存在を鮮やかに示す。辺りに所狭しと並ぶ家々は、陽光に輝く、真白い砂壁だ。

通りを歩く人の表情は皆、一様に明るい。豊かで、温かくて。満たされている所なのだろうと、琴子は壁に身体を預けるようにして、流れの人波を眺めていた。

(眩しい…)

否。

琴子には、眩しそう。

身体を壁に引き摺るよつにして、琴子は通りを一本奥へと進んだ。街角を一步奥へ入れば、そこは俗に『スラム』と呼ばれる、犯罪と貧困の街が顔を覗かせる。

(そんな場所の方が、居心地がいいなんて…)

可笑しこそだ、と琴子は力なく笑った。

意識が時折、途切れがちだ。もう、限界なのだろう。思考の奥で、琴子はぼんやりとそんなことを思つていた。

壁伝いに、そつと地面に倒れこむ。冷たい地面の感触が、頬に馴染んだ。

ふと、指先にかさりと微かな感覚が伝わって、それが既に朽ち果てた木の葉なのだと、琴子は鈍く動く頭の中で理解した。

同時に、何の躊躇いも無くそれを握り締めると、口へ運ぶ。とにかく、腹が減っていた。

もう、何日まともな食事を摂つていないのでだろうか。  
もう、何日風呂へはいっていないのだろうか。

もう、何日他人と言葉を交わしていないのだろうか。  
もう、何日…

「 かえりたい、な…」

ポツリ、思わず零れた言葉は、無意識のものだった。けれど、すぐには言葉を失う。

(かえりたい…？ いつたい、どこへ…？)

帰る場所なんて、あるのだろうか？

友人のいた、両親のいた、あの場所？  
あの場所へ帰つて、何がどうなるというのだろうか？  
仮初の友情を結んだ友人たちと笑い、両親にすら関心を持たれず、  
意味も無い生を生きていた、琴子。

「は、はは…」

笑い声が、掠れた。

「かえる…『ましょ、な、んて…ない…』」

平凡で、安穏で。ぬくぬくとつまらない日々を過していた、あの世界。

そんな世界から一転し、異形の獣に連れられやつてきたこの場所で、今度は獣が姿を消し、人は琴子を『死を呼ぶ神子』だと罵った。

皆が、琴子を『いらない存在』だと、言つてゐるよつで。

（親も、他人も、世界すら  
拒絶『するんだね……』）

あたしを、『

視界が霞む。

喉がカラカラで、もつ指を動かすことすら億劫だった。

（死ぬ、のかな…？）

今度こそ？

（誰も、あたしを知らないこの場所で…？）

死ぬのだろうか…？

こんな場所で。こんな世界で。  
誰にも気に入られることがなく、誰にも喜んで貰おうがねえ」となべ。  
ひつせつと。

(しゅ…?)

そんなに、あつやつと？

琴子を『拒絕』し、『否定』する、この場所…この、世界で？

そう、冗談ではない。

「じょいだんじや、ない」

(な、に、それ、ッ?)

「

〔冗談では、ないのだ。〕

ふつふつと、怒りが琴子の胸を襲つた。

あの世界でも、異世界でも、いろんなにもあつたと琴子を『紅葉』  
する世界。  
琴子を、『排除』しようとする人々。

そんな彼らの思惑通り、あつけなく死んでなび、やるのか。

(せつたいつ……、生きてやる……。)

愛されることなんて、とうの昔に諦めた。  
たつた独りで孤独だなんて、もう思わない。  
けれど、親も、他人も、世界すら。琴子を拒絶し、排除しようと  
するのならば。

だつたひ、琴子は生きてやるのだ。

生きて、生きて、生きて。

簡単に死んでなび、やらない。その心算通り死んでなび、やらない。  
といふとこ、生きてやる。

「生きてやるッ……！」

喉の奥。低く呟いた声は、掠れていたけれど。ザツと土を踏むその音に気づくことなく、琴子の視界はそのままブラックアウトした。

漆黒の闇の中、鞍袴琴子は独り、佇んでいた。

意識はぼんやりと混濁し、考えを巡らせることが億劫だ。

視線だけで辺りを見回す。けれど、建物も人も、木や草すら見当たらず、ただただ『闇』だけが琴子を包んでいた。

ぶるつと身体が震える。恐怖からか、寒さからは分からなかった。次第に胸中を不安が襲い、けれど、琴子は恐る恐る歩き出した。しばらく歩き続けると、自分の足音以外に何か重なる音を感じて琴子は不意に立ち止まつた。

カツリ、カツリ。

一定のリズムを刻むその足音は、琴子のそれよりも、遙かに早く、けれど優雅さすら窺えるものだった。

驚いて目を丸め、視線を走らせる。ちょうど斜め前の方向から、橙色の淡い光が零れていることに気づき、琴子は慌てて光に駆け寄つた。近くまで歩み寄れば、それが古い木製の扉から零れたものだということを理解する。

そうして、微かな隙間からそつと中を見渡せば、室内には黒い外套をすっぽりと被つた人物がこちらに背を向けるように佇んでいるのが目に付いた。その正面には、向かい合いつようにして男の姿がある。

男は紺藍の髪に青碧の瞳を持ち、酷く整つた面立ちをしていた。その顔に見惚れながらも、冷たさすら感じさせる男の表情に琴子は小さく息を呑む。眉ひとつ動かさない男の顔は、どこか人形のようだった。

男の視線は一心に外套の人物に向けられ、短な沈黙の後、ようやくその口火は切られた。

「あの獸。眞に”傳かしすく者”であるか？」  
「相違ありません。あの獸こそ、神子を守り、導き、神子と共に”最期の審判”を行つ”傳かしすく者”でありますわ、わが君」

ひとつ、鼓動が高鳴った。

外套の人物の声が、明らかに”女性”のものであつたこともそう  
だが、否。  
それよりも。

（神子……？）

神子と言つたのだ。それに、獸……？

『ティーダ……？』

小さく呟いた刹那、ぱつと黒い外套が揺れた。翻る布の隙間から、  
紫紺の髪が覗く。そして、こちらを勢い良く振り返つた女の瞳の

色に、琴子は驚愕した。

(オッヂアイ…!)

それも、ティーダと同じセピアと翡翠の

…!

振り返った女の視線が、琴子のそれと絡み合つ。女は、男と同様、人形のように美しい顔をしていた。

呆然と息を呑む琴子をしばらく見据えたまま、しかし、女は紅い唇をゆつたりと持ち上げる。

何故か、酷く吐き気がした。

「どうした、ライラ」

扉へ視線を寄せたまま、微動だにしない女に、男は怪訝そうに声をかける。

びくり、と琴子の身体は強張つたが、ついと向けられた男の視線が琴子を認めるることは無かつた為、おそらく男に琴子の姿は見えないのだろうと、いうことが窺えた。

小さく安堵の息を吐くが、女の双眸は変わらず琴子を捕らえて離さない。琴子は言い知れぬ恐怖から、自身の胸元を固く握り締めた。女の半月に細められた双眸も、緩やかに弧を描く唇も、琴子には酷く恐ろしかった。

短な沈黙の後、女はふっと息を吐く。

「いいえ、わが君…。珍しい仔猫が迷い込んだだけですわ…」

くつり、女の喉が鳴った。

紡がれた台詞に、男の眉が微かに上がり、琴子の心臓は鼓動を早める。

「心配には及びませぬ。遅かれ早かれ、仔猫は墮ちて参りますわ。わが君の御手に」

『 ツー。』

息が、詰まりそうだ。呼吸が、上手くできない。  
女の瞳が語っているのだ。

”今は未だ、その時ではない” のだと。だから、”見逃してやる”的だと。

その目に滲む女の思考を読み取るや否や、琴子は半ば無意識のうちに、その場を駆け出した。一刻も早く逃げなければならぬ、という危機感だけが、琴子の胸中を覆っていたのだ。

だから、琴子は知らない。

「 そう、必ず…」

妖艶に微笑んだ女が、囁くように呟いたその言葉も。  
その言葉の、意味する」とすら。

暗闇の中を、ひたすら走った。脳裏に焼きついて離れない、あの女の紅い唇と、瞳の色から。ただただ、逃げることだけを考えて、琴子は走り続けていた。

けれど、走つても走つても、前へと進んでいく気配すら窺えず、琴子の心は逸るばかりだった。

どれほど走ったのか、息も切れ切れになってきたころ、ようやく再び光が現れた。

光の前で立ち止まり、それが先刻と同じ、一つの扉から零れているものなのだとこゝに気づき、琴子は十分に用心して扉に近づいた。

扉は先ほどのものよりも、幾分か簡素な造りだった。そつと室内を覗き込む。同時に琴子は目を丸めた。

こじんまりとした室内には、アンティーク調の家具が幾つも敷き詰められている。床にはワインレッドの柔らかそうな絨毯がしかれ、小さな窓のカーテンが暖かな風に微かに揺れていた。

天蓋つきのベットの側の花瓶には、大輪の薔薇が幾つも生けられ、見事な刺繡の入った壁紙と共に、部屋を鮮やかに彩っている。それは、決して華美ではない、落ち着いた雰囲気の『女性の部屋』だった。

部屋は細部に至るまで、手を尽くされているように感じた。琴子のような素人目にも、高級品で埋め尽くされていることが分かるのだから。

(なんだろ?...なんか、懐かしい...?)

訳も無く、胸が痛む。不思議な感覚だった。

「

『ハーフ』...」

不意に室内に木霊した声に、琴子は目を瞠る。ベッドの陰に隠れて見えなかつたものの、少女が一人、床に座り込んで震えていたのだ。

琴子はすぐに、それが自身の思考を闇の底から浮上させた『嗚咽の主』であることを悟つた。

緩くウェーブのかかつた、長い漆黒の髪が、少女の小刻みに震える肩と同時に宙を舞う。細く線を描く肢体と、淡い珊瑚色のドレスから覗く、真白い肌。ふと、琴子はその少女の顔を覆う掌が、赤く染まつてゐることに気づいた。

酷く見覚えのあるそれは、『血』だ。

驚いて、思わず凝視する。こんなか弱そうな少女が、一体なぜ…?

眉を潜め、少女をじつと見つめる。瞬間、ギイ、と扉の軋む音が響いて、琴子は思わず音の礎を視線で追つた。同時に、少女が勢い良く顔を上げる姿が目に付く。

刹那、琴子は息を呑んで戦慄した。

少女は酷く整つた顔立ちをしていた。しかし、何よりも琴子が驚いたのは、少女の顔立ちが明らかにアジア人種だつたことだ。

ここで暮らす人々は、皆一様に欧米人独特の顔立ちをしていたはず。しかし、目の前の少女の涙に濡れた瞳は、闇に溶けるような黒で、堀の浅い顔立ちに、小さな鼻。薔薇色に染まる頬に、ぷつくりと程よい厚みを持つた唇。卵型の柔らかな線を描く顔は、まさに『東洋人』といつても過言ではない。

「つ、領主さま…」

少女の唇が微かに動き、零れ落ちた鈴のような声に、琴子はハッとした。慌てて少女の視線を追つと、その視線の先・扉の前に、一人の男が佇んでいた。

恰幅のいい体格をしている男だ。田髪交じりの髪に、口ひげをはやしている。年齢はおそらく六十代前後。口元に浮かべられた笑みと、細められた瞳に、嫌悪感を抱く。

服装はゆつたりとしたつなぎのローブのよつなもので、袖口や襟元に入った豪華な刺繡は金糸や銀糸であつらわれている。決して趣味がいいとはいえないが、それだけで、男が『領主』と呼ばれる地位にいることが納得できた。

「おや…絹の!」と柔肌が台無しで『わこま』。どれほど、無体を働かれたのか…」

つい、と男は少女の両手に視線をやつて、ついで、血の滲んだ扉を見やつた。

少女の身体がびくりと強張る。

「でしたら、どうぞ」かいつ出してくださつ…」

少女は半ば叫ぶように声を上げた。その言葉で、琴子は少女の手の傷が、扉を叩き続けてできたものだと理解する。少女はこの部屋に、閉じ込められているのだと。

しかし、男は眉ひとつ動かさず、少女の手をひとつ立ち上がらせた。そのまま、穏やかに微笑む。

「それは無理な願いです。貴女様は大切な、みこひる神子姫様であらせられ  
る」

男の口元に、琴子はこれ以上ないほど壁付した。

いま、男は何と言つた…？

『神子…？』

神子姫、と。

老婆の言葉が、頭を過ぎる。『神子』は、『闇色の髪』と『黒曜  
石の瞳』をしているのだと。

目の前の少女は、確かに黒髪に黒い瞳で。  
けれど、領主が少女に向ける態度や言葉遣いは、老婆が言つ『死  
を呼ぶ神子』の扱いとは、程遠い気がした。

『どうして…？』

だんだん頭が混乱してきた。目の前の少女は『神子姫』で。琴子は死を呼ぶ『千年の神子』で。

丁寧に、大切に扱われる『神子姫』は、けれど『監禁』されている。

なぜ？

「では…では、もう我慢は言いません。ここから出ることも、の方に会うことも、望みません。ですから、お願いです…！　の方を傷つけないで！」

ぼろぼろ、少女の瞳から零れ落ちる涙の雫。そんな少女に、領主は微笑を深く刻む。

ギクリ、と琴子の身体が強張った。

（だめだ、聞いてはいけない

「残念です、神子姫様。身を知らぬのな者は

『 だ、め ！ ！ ！ やめ て ！ 』

( 聞い ては イ ケナ イ ！ ！ ！ )

「 」 覧 も 、 の外。  
い あや の が、 立ち上つて もまがい  
頂ける ょう ？ 」

優しさを含むその囁きは、少女の瞳を驚愕に見開かせた。

『 やめて…… やめて、 やめて、 やめて…… 』

重

な

つ  
て

。

崩

少  
女

壊

す

る

。

の

精こ  
ころ

神

。

いやああああああああ  
！」

連

り  
ン

ク  
す

る。

な

つ

て。

「駄目で

すよ。

上は、

引き込まれます

それ以

「

ツ――！」

耳元で響いた声に、琴子は刹那、勢いよく目を見開いた。



バチッと、指先に鋭い痛みが走る。手元の大きな水盤に、ライラの鮮血が滴り落ちた。

「邪魔が入ったか…」

小さく呟いて、薄つすらと微笑む。

先刻、主とのやり取りを精神体で覗き見ていた琴子。

彼女の精神にもぐりこみ、その奥底にライラは小さな砦を築いた。夢幻の砦。宿主の精神を崩壊に導くそれを、しかし、外部からの障害で打ち破られたのだ。

ティーダの能力は封じてある。ならば、砦を破壊したのは、別の人間と言つことになる。

「面白い」

くつり。朱の唇を歪ませ、ライラは薄く華奢な肩を震わせた。

闇の中に、仄かな蠟燭の灯火が揺らめいていた。窓一つ無い狭いレンガ造りの室内に、わずかに鼻をくすぐる黴の匂い。部屋の中央には、木目調の丸いテーブルと蠟燭が一つ。テーブル越しに向き合う形で、そこには二人の男が佇んでいた。

「 しくつた」

軽い舌打ちと共に、苛立たしげな咳きが零れる。硝子のような朱色の瞳を持つ男は、思わず渋面を作った。歳の頃は、恐らく20代前半、だろうか。灰白色の長い髪を無造作に首下で括り、背中の中ほどまで垂らしている。けれどそこに女々しさ少しも感じられず、威風堂々とした空気を纏っていた。

「逃げられましたか…。しかし、玉響たまゆりのことではござりますれば、致し方ないことかと…」

対面する男もまた、深い溜息をつく。先の男と違つて、褐色の肌が印象的だ。腰には長剣を携え、鍛えられた体つきと、凛としたその様子から、武を嗜む者であることが窺えた。鮮やかに艶めく瑠璃色の髪は短く切り揃えられ、左の額の中ごろから顎まで、縦に伸びる幅1センチ程度の刀傷が痛々しい。ハシバミ色の瞳は、僅かな焦燥に揺れていた。

「ふん…。尻尾を掴ませぬか…惡々しい」と

きつく唇を噛み締め、長髪の男が吐き捨てる。同時に、空間が歪みをおこし、颯然と風を切る。眼前で、褐色の男…アデルが、ぎょっと田を見開いた。

「　　、エンリル閣下ッ！」

狼狽するアデルに、エンリルは一警をくれると、歪みは瞬時に歪いで搔き消える。

「　　まあいい。いずれ足取りは摑める」

滋きは、田に溶けた。

めぞめは突然だった。

皿に映る、簡素な室内の天井を呆然と見据えながら、琴子は暫し  
身じろぎ一つせず、固まっていた。

(な、ん…だった、の?)

あの、黒髪に黒目の人、神子姫と呼ばれていた、少女は。  
否。違う。そうではなくて、  
こののだ?

目覚める前に、聞こえた、あの声は?

そこではじめて、琴子は全身の力を抜き、ふっと息を吐いた。  
ゆっくり、冷え切った手足の先に、熱が行き渡る。身体は震える  
ほど寒かつたが、全身にびっしょりと汗をかいしている。あの、悪夢  
のような夢のせいだと、琴子は何となく悟った。

そつと身体を起こし、辺りを見回す。

上等とは言えないまでも、お口様の匂いのする清潔なベットで、

琴子は今まで眠っていたようだ。

部屋には琴子以外、誰の姿も無い。

ベットのすぐ側の窓が開けられ、穏やかな風が、カーテンとサイドテーブルの花瓶に活けられた白い花を揺らしていた。

屋外から、小鳥の囀りも耳に付く。

不意に、腕や足に巻かれた白い包帯が目に付き、琴子は息を飲んだ。

夢じやない。

夢じやない。

琴子が殺されかけたことも、

琴子が殺したこと。

きゅっとシーツを握り締める。

夢じやないのに、ここは酷く長閑だった。

「目が覚めましたか？」

「つーー！」

気配がしなかつた！

ぎょっと身体を竦め、琴子は慌てて声がした方向へ向き直った。

恐らく6畳程度の室内に、たった一つの出入口のドア。その側に佇むのは、鈍色の髪に飴色の瞳をもつ優男だった。麻の簡素な洋

服に身を包み、穏やかな微笑を浮かべている。

手には木造りのトレー。皿が二つ乗つており、微かな湯気と、ふんわりと食欲を誘う香りが漂つていてる。

男は青年と呼ぶに相応しい、おおよそ、あの屈強な山賊たちには遠く及ばぬ華奢な形なつをしていた。面立ちも、雄雄しいといつよりは中性的。ぱやつとしていて、すぐさま襲われるということはなさそうだ。警戒心を解くわけではないが、琴子はわずかに肩の力を緩めた。

「大丈夫ですか？ 君はこの聖都のスラムの小道に倒れていて、もう2日も眠つたままだつたんですよ？」

「……」

(2日… そんなに?)

じつと青年から視線をはずさず、睨み付ける。一步でも男が近づけば、すぐさま窓から逃れるつもりだった。彼の手に持つ食事は、琴子の胃をいたく刺激したが、それでも微笑みながら刃を向けられたり、例えば食事に毒が盛られていたりしては、たまつたものではないのだ。

だんまりを決め込む琴子に、青年はきょとんと不思議そうに皿を丸め、首を傾げた。

「あの、具合が悪いのですか？ あ！ 申し送れました、僕はディアといいます。気ままな旅人です。えーと、宜しければお名前をお聞かせ願えますか？」

「……」

「あの……？」

「……」

「えーと……」

「……」

「その……」

「……」

「あああっ……！」

「？！」

それまでの、ぼーっとした様子から一点し、突然声をあげた青年  
ディアに、琴子はぎょっとした。

一体何事だ！

「すすすすみません！」「はん、食べますよね？！　僕話すのに夢  
中になつて……これじやまるでお預けしててるみたいで……  
じゃ

ない！　あの、失礼ですけど、もしかして喋れないとか……？　ああ、  
スープ冷めちやつた……じゃなくて、ごめんなさい、ちょっと僕混乱  
してて……お医者様呼んだほうがいいですよね？！　すぐ呼んで来ま

す！ あ…！ あと、スープも温めなおして

「

一息に言ひ切つて、否。言い切る前に部屋から出で行くと、直後、  
バシャンといつ、何かがぶちまけられた音と、ぎやあああとこいつ悲鳴  
と、それからバタバタと床を蹴る靴音が慌しく響き渡つた。

（トレー、ひっくり返したのかな…）

じゅやうあの男は、かなり抜けた性格のよひだ。琴子は丸めた目  
を一度瞬かせた。

未だ未知の異世界の、長閑な春の一日。

「…………変なヤツ」

ぱつり、小さく囁いて。

それが、琴子とティアの、ファーストコンタクトだった。

ディアと名乗った青年に甲斐甲斐しく世話をされたこと、3日。琴子は彼から逃げるタイミングを見計らってこじりだつた。

「おはよー、ジャムサムー。」

ノックの音が一度響き、続いて見慣れたディアの笑顔が、ドアの向こうから現れる。既に身支度を整え、ベットに腰掛けた状態のまま、琴子はちらりと一瞥をくれる。

スマイルゼロエム。

何となく、琴子の脳裏に某ファーストフード店の謳い文句が浮かんで消えた。そのまま視線を逸らすと、ディアが困ったように苦笑する。

「じゃあ、今日も食事と薬、置いておきますね」

今日からは、『飯は通常食ですー』と微笑むディアに、琴子は眼前に置かれたトレーを見つめた。

彼が手に持つトレーには、昨日までのスープやお粥のようなもの（ペースト状の何かだった。米ではないのは確かだ。魚をすりつぶした様な感じもする）とは違つて、もつと咀嚼が必要なおかずと、ナン（イング料理のアレだ）のようなものが乗つていて。これがこの通常食、らしい。そして、トレーの隅には薬。

あれから、相変わらず琴子はディアの前では言葉を一言も発して

いない。しかし、ディアは何も語らない琴子とは逆に、ひたすら琴子に話し続けていた。

ディアは、ここ聖王国レジェンドの首都のように大きな街から、名も無い小さな村まで、時には野宿などを行いつつ世界中を旅する、気ままな旅人らしい。元々”刻印師こくいんし”という技師だそうで、アクセサリーなどの宝石類への装飾から刺青まで、ありとあらゆるものに刺繡を施すことを生業としているそうだ。旅の最中の資金繰りは、主に露天での刻印師としての仕事で成り立っているのだと言う。この街には長期滞在予定で、琴子が運ばれたこの家は借家として借りているらしい。どうりでディア以外の人の気配がしないはずだ。めざめた次の日、身体にこびりついた血や泥などの汚れを落とすよ、蒸しタオルを手渡されたときに、（頼んでもいいのに）ディアが勝手にべらべら喋りだした内容がそんな話だった。

琴子はこの3日間、ディアをずっと観察していた。結果、琴子のディアに対する印象は、おっちょこちょいで激しくパニッシュ体質、加えて気が弱い、というところに一時落ち着いていた。

ディアはいつだって穏やかに笑う。物腰は柔らかく、言葉は丁寧で、常に”ですます”口調だ。のんびりしていて、正直よく今まで野宿で野党に襲われず、無事にやつてこれたと思う。

けれど、だからこそ琴子はディアに疑念が尽きなかつたし、信用などできなかつた。

明らかに人が良さそうな笑顔は、琴子にとっては気味が悪かつたし、甲斐甲斐しく琴子の世話をやく様子はどこか滑稽にも思え、得体が知れなかつた。

無償の善意など、ありはしない。

だつて人は誰しも自分が一番大事なのだ。

「この世界は琴子に、それを教えてくれたのだから。

しかし なぜ、デイアは琴子に憎しみも去えも、抱かないのだろうか？

“死を呼ぶ神子”は、この世界で誰しもが耳にする御伽噺のよつなもののはずだ。

3日前、デイアが医師を呼んだときも、琴子はその可能性を思いだし、部屋のドアを押さえて決して中には入れさせなかつた。以来、デイアは医師を呼ぶことを諦めたようだつた。

しかし、デイアも神子について知つてゐるはずだとこゝに、彼は一向に琴子に害をなそとしない。琴子の髪の色も、瞳の色も、まるで気にした様子もない。

当初、食事や薬に毒でも盛つてゐるのではないかと疑つてみたが、あまりに頑なに食事を拒む琴子に痺れを切らし、同時に琴子の懸念を察したように、デイアは琴子の田の前で皿に箸をつけて見せたのだ。

「一体、何を企んでいるのだろうか？」

（気持ち悪い……）

「何より、落ち着かない。」

（はやく……）

「はやく、ここから逃げなければ……。」

身体のだるさは抜けた。傷もこの3日である程度癒えている。痛みはほとんど感じない。

もう、動くことも歩くことも、苦ではないだらう。

ならば……。

( 今夜にでも、夜の闇にまぎれて逃げよ。 )

殺されてしまつ前に。

そつと、手渡されたトレーの食事に箸を付けると同時に、ディア  
が嬉しそうに微笑んだことに、生憎琴子は気づかなかつた。

夜はあつといつ間にやつてきた。お譲り向きに、雲は空を覆い、  
闇は月を消してくる。琴子の持つ、瞳と髪の色を隠すには、絶好の  
ショチュエーションだ。

ベットから起き上がり、壁にかけられた黒い外套を手に取ると、  
琴子は窓からわずかに身を乗り出した。一筋の光すら望めない、漆  
黒の闇の向いから、虫の声だけが微かに響く。

リリが一階でよかつた。

小さく頷いて、…一度だけ、背後をふり返る。

ふつと、脳裏にディアの微笑が浮かんで消

えた。

(変なヤツ、だつたな……。もつ、関係ないけど)

再び前を向くと、琴子は一度と後ろを振り返らなかつた。暗い夜道を駆けながら、琴子は今後について考へる。

即ち、これからどうすべきか。

ディアが琴子の瞳と髪の色を知つてゐる故に、この街にはもう留まることはできない。

いつ、ディアが琴子のことを他の者に告げるとも限らないのだ。どこかへ移り住むしかない。

せめて髪を染めることができればと思つたが、そんなことが、この世界の文化レベルで可能かすら琴子には分からぬのだ。

ならば、この瞳と髪を隠し、生きていくしかない。

そう、琴子はもう、生きると決めたのだから。

この街にやつてきたときと同様、昼に動き、夜は休むか…しかし、瞳と髪の色をハツキリ識別できる昼間、明るい陽の光の下を歩き回るのは危険だ。できればそれは極力避けたい。だが、女である以上、夜出歩くには身の危険が付きまとう。こんなとき、自分が男ならば良かつたとつづく思わずにはいられなかつた。なんと面倒臭いことか。

(やつといえ、生理、きてないな……)

おそらく一ヶ月以上、ここで過しているにも関わらず、月の物がなにことに今更ながら思い至る。

琴子は元々不順な方だが、環境の変化に、身体がついていっていない

ないのだろう。

（ああ、ホント、女つて面倒くさい……）  
ぎゅっと眉を寄せて、顔をしかめる。

ああ、違う、思考が脱線した。琴子は首を振ると、再び考えを元に戻す。

木を隠すには森の中、というくらいだから、この街のようになるべく人の多い所の、スラムにでもひつそりと身を寄せるのが望ましかつた。小さな集落はきっと危ない。人口が少ないと余所者は田立つ。田舎ほど排他的なのだ。

あるいは他の国へ……とも思つたが、それこそ、多分不可能だ。関所・検問があることは簡単に予想できる。山賊やゴロツキが蔓延つているのだ。多分、それを駆逐する騎士やら兵士やらもいるのだろう。なんとファンタジーな世界！ 龍や魔物もいるのだろうか。まだ出逢つてはいないし、出逢いたくもないが。

考えれば考えるほど手詰まりで、頭がイタイ。

そこまで考えたときだつた。  
ザツと、土を均<sup>なら</sup>す音が響く。

（ しまつた！ ）

考え込みすぎて、気づかなかつた。闇の中に、黄金に光る双眸。  
喉を鳴らす、低い声。

琴子の倍以上ある大きな獣が、正面に立ちはだかつた。

「つ……！」

（ 大きい…… ）

風体は、どこか虎に似ているようにも思える。しかし、田の前の獣には尾が一本あった。しかも、獣の体長ほどの中さがある。

「ぐり、と自身の唾を呑み込む音が、嫌によく聞こえた。田を逸らせば、今にも襲いかかってきそうだ。

慎重に、じりっとわずかに後ずさる。しかし、同時に獣も歩を進めた。

琴子が持っているのは、ナイフ一本だけだ。  
あの

て、めえ…？！

刹那。

「つ！」

自らの手で刺し貫いた、あの男の瞳が。  
肉を裁つ、あの感覚が。

一気に脳裏に蘇る。

背筋がピリピリした。恐怖で、小刻みに身体が震える。

（だめだ、おさまれ！…）

恐怖にのまれる。それでは駄目だ。獣はそれを敏感に感じ取るのだ。

浅く息を吐き出す。少しだけ、鼓動が落ち着いた。

よし。

ゆつくつと瞼を上下させた刹那、琴子は一気に駆けだした。

背後で低い唸り声が響く。夜の獣道は、そこかしこに伸びる樹木の幹や、葦の長い草で走りにくい。こうなれば、羽織った外套も邪魔だった。なるべく木々が密集している方へ向かう。小柄な自分と違つて、あの大きな獣には走りにくいはずだと予想を付けた。それは決して間違いではなかつたようで、苛立たしげな声が背後から耳についた。

一定の距離を保ち、琴子はひたすら走つた。怪我をしていた足が、痛みを増してきたような気がする。

（拙い…）

そのままでは、捕まる…

おそらく、その焦りがまずかったのだ。「

「つ？！」

刹那、琴子は地面を走る太い幹に足を取られていた。

とつてに両手をつく。やあつと膝が砂をひつかいた。鋭い痛みに顔をしかめ、しかしそうに背後に獣の気配を感じて琴子は慌てて後ろを振り返った。そして、その距離に戦慄する。

獣は、琴子の後ろ2メートルの位置で立ち止まっていたのだ。2メートル…それは獣にとって、一足飛びで琴子に襲いかかることが可能な距離なのだろう。

闇夜に爛々と輝く飢えた双眸。

（だめだあたし

死ぬかも）

背筋にぞつと悪寒が走り、呑み込んだ唾がごくりと喉を鳴らす。

ぴくり、獣の前足の指が動いた。

（あ、くぬ…）

未だ起き上がることもできないまま、琴子は迫り来る獣に喉元を喰らいつかれる自身を想像した。

カツン、とか細い音が、張り詰めた空気を切り裂いたのは、獣が琴子へ向かい飛び出そうとした、まさにその時だった。

「あ

(え?)

獣の米神にぶつけられたのは、小さな小石で。  
響いた弦に驚愕し、琴子は視線を走らせる。

ちょうど、琴子の右横。数メートルの距離の先に、びっくりした  
ようすで目を丸める、ディアの姿がある。

「あー…あたつちやつ、たつ」

頬を引き攣らせ、思わずといった様子で零れた言葉を皮切りに、琴子の眼前の獣が低い唸り声を上げた。食事を邪魔されたことで、完全にディアを敵とみなしたらしい。その目は血走り、怒りに染まっている。獣がディアに向かつて駆けだした刹那、ディアは叫んだ。

「逃げてください！！」

なんで？

「まだ、ディアと獣が走り去った、闇色の森の先を凝視しながら、琴子は軽くパニックに陥っていた。

なぜ、ディアは琴子を助けた？  
あんな恐ろしい獣に、あんなひよろつとして頼りない優男が、勝てるわけがない。  
死ぬに決まってる。

なのに、なぜ琴子を庇つた？

分からぬ。

氣味が悪い。  
気持ち悪い。

混乱する。

だつて、この世界はいつだつて琴子を拒絶して来た。  
否定、してきた。  
なのに

「なんですよ……」

ふんわり、春のこもれびのよつな、あたたかな笑顔。  
自分とは天と地ほども違つよつな。きっと、誰からも愛される存  
在。

逃げて下さい！――

（やうよ、逃げろつて、あいつ言つてたじやない）

分かつてゐる。自分は逃げるべきだ。――こで、ディアがあの獣に  
引き裂かれて死んでくれるほうが、琴子にとつては都合がいい。

そんなことは、分かっている。  
分かって、いる。

琴子は痛む足を叱咤しながら、ゆっくりと立ち上がる。『ディアたちが去った先を一瞥し、しかしすぐに視線を逸らした。

「やつよ、  
あいつは死んでくれた方が、いいの  
よ

呴くと同時に、琴子は背を向けて駆けだした。

「まづいですねえ……」

ぱつり、眩きは闇色の空氣に溶ける。

そんなセリフとは裏腹に、ティアは背後に獸の氣配を感じつつ暢気に頭をかいてみせた。

表情に緊張感はひとカケラも見当たらない。

「じつに来てくれたのはいいけど、そろそろ追いつかれそうな感じですし……」

どうしましようか……などと、困った風にぼやきながら、けれど足並みはとめない。

大きくなつた大木の幹を軽やかに避け……あるいは蹴りつけ、生い茂る草に足をとられることもなく、ひたすら走り続ける。息は上がりていかない。なんせ、ティアのモットーは『三十六計逃げるにしかず』。要するに、『逃げるが勝ち』だ。

足の速さは彼の唯一の自慢だ。つまるところ戦闘能力は皆無なのが。

しかしティアは、たとえ後ろ指をされようが、馬鹿にされようが、臆病者と罵られようが、全くもって気にしない。にっこり笑つて「えつ、そうですか？ いやあ、照れるなあ、ありがとうござります」と礼を言つ、そんな人間だった。

「このまま朝まで追いかけっこせんのつもりたいですしだが。

ぼやいて、腰に巻きつけた革袋から、小さな火薬岩を取り出す。

殺傷能力はないが、田ぐらましきりことはなるだろ？

躊躇なくそれを背後に放り投げると、爆音とともに、土煙が舞つた。もくもくと立ち上る煙に満足気に頷き、ディアはせりて走るスピードを上げた。これで、少しほは稼ぎができるそうだ。

森の奥深くへ、ディアは駆け出した。しばらく走り続けた頃だらうか、深い森の木々を切り開くように、ざつと視界が晴れた。

「あ」

視界の先にはぼっかり浮かぶ丸い月が一つ。

塵だ。

谷底から巻き上げる風に、ディアは眉を下げた。

「まいったなあ…風上か」

獣は匂いに敏感だ。このままでは見つかってしまう。  
もうしばらく追いかけっこは続しそうだと溜息をついたその時だつた。

「動かないで」

シンと澄んだ空氣の中に響く、心地よい聲音。  
ディアは思わず目を見開いた。

「ああ…」

ちょうど、ディアの視界の右端、数メートル先に、先程逃がしたばかりの少女の姿があった。

漆黒の闇に溶けるように、黒い外套の隙間から、真白い肌が垣間見える。月光にわずかに照らされるその瞳も、まがうことない、闇色。ディアはしばしその姿に息をのみ、しかしハッとしたように声を上げた。

「なぜ、戻ってきたんですね？」

「…」

思わず声を荒げたものの、なぜか怒鳴り返されてディアは開いた口をぽかんと開けたまま田を白黒させた。一の句が継げない。

初めて聞いた少女の声は、凜としていて、透き通るように耳に感じる心地よいものだった。けれど、少女の顔は苦痛にゆがんでいる。

「なんで…なんで…あんた、なんであたしを助けたの…」「なんで…」

困惑するディアに構わず、少女はひとつじりかむように、葉を紡いでゆく。

「なんですよ、なんですよ…あんた、知ってるんでしょう？ 分かってるんでしょう？！ あたしが、死を呼ぶ神子だって…この髪もこの眼も、恥まわしいものでしかないと…」

「…」

「なんで助けるの…なに企んでるの…」

「僕は

「

言いかけて、ディアは口を噤んだ。わずかな逡巡とともに落ひる沈黙が、ぴんと空氣を張り詰めさせめる。しかし、すぐにまたすぐに視線を少女へ寄せると、ディアはヒヒヒヒと微笑んだ。

「 一目ぼれって、信じますか? 」

「 は ？」

「 僕、君に一目ぼれしたんです 」

「 一目ぼれ ？」

少女はディアの言葉を復唱する。

そうして、次の瞬間、少女の顔が真っ赤に染まった。

「 ばつ ！ ！ ！ なつ なつ ！ ！ ！」

あわてふためく少女に構わず、ディアは笑顔のままで。

「 君の言つようこそ、君の髪色も瞳の色も、僕は気づいていましたし、知つてました。それが、何を表わすのか。でも、僕にとつてはそんなこと、どうでもいいんです 」

言って、ディアは少女に何の躊躇いもなく近づくと、外套の隙間

から一握れる髪を一房手に取つた。

そういうふうに、そのままであることと歴史を断ち切る。

二二二

息をのむよつた、一拍の間の後。

か一歩と耳まで朱に染まつた少女は、しかし次の瞬間ティアを両手で突き飛ばした。

あざりと身を離したティアを、少女はギッと睨みこける。その双眸にわずかな涙が滲んでいたが、顔は赤く染まつたままで、ティアは思わず頬を緩めた。

「ばつかじやないの!? そんなの信じると思つ? ! なに企んでるの! あたし」「これ以上構つなーで!!!

「僕は、何も企んでなんかいませんよ？ 本当に、君に一眼ぼれしたんですね… といつても、信じてはもらえませんよね」

困ったように微笑むディアに、少女は苛立ちを隠さず舌打ちする。谷底から舞い上がる風が、少女とディアの髪を微かに撫でつける。しばし考え、そうだ、とディアは思い浮かんだ良案に口火を切った。

「では、僕と取引しませんか?」

「ええ、取引です」

胡散臭げに睨みを利かせる少女に頓着せず、ディアはにつっこり微笑んで、まず少女の思い違いから正すことにした。

「君は、神子が恋わしい存在であると言いましたね？」  
「でも、それは違うんです」

「…え？」

びつくりしたように、少女は目を瞠る。寝耳に水だつたのだろう。頬から熱の引いた少女の瞳が、困惑に揺れている。それを確認しつつ、ディアはさり言葉をつづけた。

「神子は、國によつてその解釈が違います。この國では、神子は確かに忌まわしい存在なのでしょう。けれど、他国では神聖な存在として崇め奉られていたりもするんです。だから、必ずしもその存在が悪いものとは限らないんです」

事実、ディアの故郷でも、神子は悪しき存在として伝わっているわけではない。ぐつと眉根を寄せて、何かを考え込む少女に、ディアはいよいよ、本題に入るべく唇を濡らせた。

「君が望むならば、僕は君が排斥されることのない安全な地…他国へと、逃れる手伝いをすることができます」

「！」

「もつ予想は付いているかもしませんが、どの国でも国境には検問が敷かれ、正式な通行手形なしに他国へ逃れることは難しい。けれど、幸い僕には色々ツテがあります。旅慣れてますから、何かと助言を差し上げることもできますしね。どうですか？ 悪い条件じゃないでしょ？」

「悪い条件どころか、条件が良すぎる…」

低く唸るような聲音で、警戒の色が浮かぶ。ディアは困ったように苦笑した。

「ええ、そうでしょうね。だから、ひとつだけお願ひがあります」

「…なに？」

緊張がピークに達する。それこそが、おそらく少女がもつとも聞きたかったことだらう。せかすような雰囲気に、ディアは再び微笑んだ。

「僕を、旅の共としてそばにおいてください。僕は、君と共にありたい。君を知りたい」

「は……？」

「君のそばにいたい。それが、僕が君に提出したたつた一つの条件です」

眼前で硬直する少女を、ディアはまっすぐ見つめた。偽りない、ディアの本心からの言葉だつた。

少女が視線を彷徨わせる。疑心、困惑、躊躇い……揺れる双眸に、様々な色が垣間見えた。

それでも、淡くほのかに落ちる月の光が、少女とディアの影を長く伸ばしたその時、少女はすっと顎を上げ、ディアを見据えた。

「あんたを、信じるわけじゃない……」

「ええ」

少女の呟きは、かたく、こわばつたものだった。

それでも、ディアは躊躇なく頷いて見せる。

「僕を、利用してもいいんです」

「うう」

唇をかみしめ、歪められた少女のかんばせは、それでも優らしく。ディアは右手をそつと差し出すと、もう何度目かになる微笑みを浮かべて見せた。

「僕は、ディア。君の名前を、教えてもらひますか？」

「… ロトロ。鞍祇<sup>くわき</sup> 琴子<sup>こいこ</sup>」

せつと手をとつ、囁くように告げられたその声に、ディアは、やつと、名前を呼べる、と笑つた。

「これからよろしくお願ひしますね、ロトロさん」

「……」

憮然とした表情の琴子と裏腹に、相変わらず微笑んだままのディア。その手を握り締めたまま、ディアは打つて変わって「といふで」と先ほどから気になつていた事実を語るべく口を開いた。

「実はですね、のつけからなんですが、非常にまずい状態になつてゐんです」「はあ？」

顔をしかめて怪訝そうに声を上げる琴子に苦笑しつつ、ディアは「困られました」とだけ告げた。

「だから、いつたい何

」

言いかけて、言葉が最後まで紡がれることはなかつた。琴子も気づいたのだろう。周囲の闇の中に無数に浮かび上がる小さな光の集い。

「…、風上だつたんですねー」

あはは、とのんきに笑うディアに、琴子は眩暈を起こしそうになる。先程の獣が、今度は集団となつて、自分たちを囲んでいるのだ。真っ青な顔色の琴子をちらりとみやり、ディアは「コトコトさん」と声をかける。

「高いところは平気ですか？」

「え？」

琴子の返事を聞くよりも先に、ディアの視界の端に地を蹴る獣の姿が過つた。永くお預けをくらつていた獣が、ついにしづれを切らしたのだろう。巨大な体躯の猛々しい獣が数匹、こちらに向かって飛び上がつていた。

琴子の顔が恐怖にこわばる。

ぐつと土を踏みしめ、飛びかかる獣を横目に、ディアは琴子の手を握り締めたまま勢い良く空へ飛び出した。

そう、つまりは、崖下へと

「バフ…バカじゃないの…！… なんでそつちに飛び込むのよ…！」

宙に投げ出された一人の身体は、重力に則つてまつさかさまに落下する。

「大丈夫、下は川ですから！」

「大丈夫なわけあるか―――つ―――！」

ああつ―――！」

つきやあああああ

鼓膜を劈くような琴子の怒声と悲鳴に、ディアはやはりのほほんと笑つた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4519m/>

---

千年の神子

2010年11月23日21時40分発行